

**「2019 年度上智大学自己点検・
評価報告書」等に関する
学 外 評 価 報 告 書**

**2020 年 7 月
上智大学学外評価小委員会**

はじめに

本学では自己点検・評価委員会の下に各種小委員会を設置して活動しており、自己点検・評価の実施にあたっては実施小委員会を設置し、活動している。2019年度は実施小委員会の下、全学の自己点検・評価を実施するとともに、初めて学内評価小委員会を設置し、学内の教職員から選出した委員による学内評価を実施した。この自己点検・評価報告および学内評価小委員会報告に対して、学長ならびに副学長が「所見」をまとめた。

これら一連の自己点検・評価活動を受けて、本報告書にまとめられている通り、学外評価委員による評価を実施した。当初は2019年度の自己点検・評価活動について、2020年4月に学外評価小委員会の開催を予定していたが、新型コロナウイルスの影響による学事日程の大幅変更に伴い、学外評価小委員会の開催を6月にオンラインで開催する運びとなった。意見交換のテーマは本学の特徴と照らし合わせて、①カトリック大学の特徴、②教学マネジメント、③内部質保証及びグローバル化、の3点に絞って実施し、オンライン開催という時間的・空間的な制約にもかかわらず、各委員の知見から忌憚のないご意見を賜った。

学外評価委員におかれては、委員就任から委員会開催までの間に世界を取り巻く環境が激変し、大変ご多用な状況だったにもかかわらず、本学の自己点検・評価活動に対し労をいとわずご協力いただいたことに心から御礼申し上げたい。

今後はいただいたご意見を真摯に受け止め、本学の教育研究活動に反映させるべく邁進していく所存である。今後とも、本学の自己点検・評価活動において引き続きご指導ご鞭撻いただけたら幸いである。

上智大学自己点検・評価委員会委員長
学長 曄道 佳明

学 外 評 価

学外評価小委員会 委員名簿（敬称略、アルファベット順）

委員長	ミカエル・カルマノ	南山学園聖園女学院中学校・高等学校 校長
委員	大場 昌子	日本女子大学 前学長 文学部英文学科教授
委員	円谷 恵	国際基督教大学 理事

スケジュール

2020年1月	委員委嘱
2020年2月～3月	学外評価実施 「自己点検・評価報告書」、「学内評価報告書」、「学長・副学長所見」を基に、「評価できる点」、「改善が必要と思われる点」、「不明な点」、「その他」の観点からアンケート回答
2020年6月	各委員とオンラインによる事前打ち合わせ実施 「アンケート」に対する本学の回答等送付
2020年6月29日	学外評価小委員会開催 ①カトリック大学の特徴、②教学マネジメント、③内部質保証、グローバル化、の3点について意見交換
2020年7月	学外評価報告書完成

委員講評

1 総評

3つの報告書（上智大学自己点検・評価報告書、学内評価報告書、学長・副学長所見）、そしてオンラインで行われた学外評価小委員会を振り返って評価できる点は、上智大学の真摯な取り組みである。これらの報告書を通して、執行部や教職員がカトリックの大学らしく、大変真摯に大学運営に取り組んでいることを感じた。日本だけではなく、アジア地区でカトリックの高等教育機関を代表する貴学だからこそ、「キリスト教ヒューマンイズム」という建学の精神を発展させながら保つためには多面的な対策は必要である。報告書と執行部とのやり取りから、この基本的な姿勢を確認することができた。

明文化されたカトリック大学の精神は出発点であって、最終的な答えではない。換言すれば、高等教育機関として直面する課題に取り組む度に基本的な方針を再確認することが求められている。特に、学生、保護者、研究費を提供する個人・団体などいわゆるステークホルダーや、文部科学省をはじめとする関係省庁、そして教会や修道会との関係において、適切な距離を保つことは重要だと考える。

一万人以上の学生を有する大規模大学である貴学において、各分野の問題点を把握し、それぞれの基準を満たす改善策を明文化しながら、未解決で検討する必要があるところを認める姿勢は確認できた。その一つの具体例は学外評価委員会が「不明な点」として取り上げた、基準4の学習成果の測定方法に対する回答である。学習成果の測定については現在多くの大学で試行錯誤しているところであるが、大学は卒業してすぐ社会に通用する人材を養成するだけでなく、アウトカムとして長い人生の中で活かされるような仕掛けづくりも必要である。意見交換を通して、貴学ではカリキュラムのみならず、カトリック大学という環境を背景に学生自らに人生や価値観を考えてもらうための仕掛けを構築する努力が伺えたことから、卒業時という短期的な視点以外にも、同窓会なども活用し、中長期的な視点で大学での学びを振り返れるような評価の仕組みの構築も期待したい。

グローバル化において貴学は日本の私立大学をリードし、グローバル化の基盤となる外国語教育において長年にわたる優れた実践を蓄積している。COIL型教育の展開やASEANハブセンターの設置および現地法人化など、貴学がその特徴を将来的にも伸ばさせていくための新しい取り組みを全基準において実行していることは高く評価できる。今後、グローバルな研究教育環境を活かした起業を大学として支援することも、貴学の特徴を一層強化できるものと考えられる。

PDCAについては担当部局を作るのではなく委員会などによる対応も考えているとのことだが、それも一つの解決策だと考える。IRに関する意見交換でも同様の話題が出たが、一つの部署が担うよりも、各部署で実施していることの方角性を統一していく方が実効性もあり、教職員がやらされている感じにならないと思われるので、今後の取り組みに期待したい。

教員評価や授業評価において優秀な教員を表彰するというのは、学外評価委員それぞれ

の背景を踏まえて拝察しても苦肉の策ではあることは否めない。これらの取り組みが大学全体の底上げにつながっているのかについては今後検証することが望まれるとともに、教員に対する授業支援による底上げの可能性についても検討の余地があるとする。

2 各基準について

(1) 評価できる点

基準1：理念・目的

カトリックイエズス会によるキリスト教主義の大学として、創立の理念を明確に示し、それを多様な方法で伝えようと努力している点は評価できる。具体的には、カトリックイエズス会センターという拠点が設置されていること、全学生のおよそ10%がカトリック高等学校対象特別入試によって入学している点、課外活動団体であるカトリック学生の会の活動など、一般学生への働きかけの中心に上記の学生が用いられていること、社会連携、社会貢献においてもカトリックの精神やネットワークが生かされていること、学生や新任教職員に対して『叡智を生きる』を刊行していること、『イエズス会教育 Q&A』を発行している、などの取り組みが挙げられる。

理念に基づき、中長期計画「グランド・レイアウト 2.0」を見直した結果を「グランド・レイアウト 2.1」として策定・公表しており、それを基盤として各種の事業を推進しようと努力している点は評価できる。特に9学部29学科という多くの部局を抱えながら、教育研究においても理念に沿った方向性を模索するとともに将来計画の進捗のために丁寧な検証を行っており、引き続き努力されたい。

基準2：内部質保証

FDの学部単位での実施など、部局単位で小さなPDCAが回されている点は評価できる。

基準3：教育研究組織

附置研究所、研究機構における研究成果を学部・研究科における教育研究活動に還元している点は評価できる。

基準4：教育課程・学習成果

教育課程の編成において、3つのポリシーを前提に定められたガイドラインに基づいて、各学部、研究科で点検、検証および見直しを実施している点は評価できる。また、全学共通科目や語学科目に関して、全学教務委員会でカリキュラム等のマネジメントを行っており、授業科目は上智大学としての特徴が明示される形で充実している。

成績評価の客観性、厳格性を担保するため「成績評価のガイドライン」を2015年度より設けて、評価をより厳密に行っている点は評価できる。

基準5：学生の受け入れ

高大連携担当副学長を学務担当副学長の分掌から移管し、学生募集に関する事項や入学試験の制度、実施に関する事項、入試広報に関する事項を包括的に把握、検討しているほか、多様な入学者選抜制度を設定している点は評価できる。

基準6：教員・教員組織

教員組織に関して、3カ年度を単位として教員人事計画案を学部・学科が学長に提示している点や、教員評価規程が整備されており、専任教員、常勤嘱託教員に関して、教員評価シートへの記入が義務化されている点は評価できる。

基準7：学生支援

アカデミック・アドバイザーを学科に配置し、履修など学習全般に関し支援している点や、留学生への対応としてカウンセリングセンターでの英語対応、国際寮の運営、信仰への配慮などは評価できる。

基準8：教育研究等環境

「グランド・レイアウト 2.1」に沿って計画的に進めている点は評価できる。また、研究機構に常設研究部門と時限研究部門を設け、効果的な研究活動が図られているほか、コンプライアンス教育や研究倫理教育も組織的に実施している点は評価できる。

基準9：社会連携・社会貢献

自治体、企業、国際機関等と積極的な連携体制を築いており、カトリック大学のネットワークを活用した国際教育プログラムを展開している点は評価できる。また、ジョージタウン大学、アテネオ・デ・マニラ大学、西江大学など海外でも有数の大学と連携したプログラムや、IFCUとの連携によるサービスラーニング活動など、多様な国際教育を行っており、COILの推進などにより、国際化の再構築を進めようとしている点も評価できる。

基準10（1）：大学運営・財務（大学運営）

大学運営における教員と職員の協働実現のため、教学系会議体に職員も委員として参画し、教学部門の事務組織に教員役職者が配置されている点は評価できる。

基準10（2）：大学運営・財務（財務）

学納金収入に依存せず、資産運用収入や収益事業収入など、財源の多様化が実現されている点は評価できる。

(2) 改善が必要と思われる点

基準2：内部質保証

現時点で、「従来内部質保証プロセスとして定義してきたものを見直し、検討を行っている」段階を経て検討を終えられたとのことから、全学的内部質保証体制におけるPDCAサイクルの実施が早急に望まれる。既に検討中とのことであるが、部局単位で回っている個々のPDCAのサイクルをどのように大学全体として把握し、実際の改善につなげるかが明確になることが望まれる。

基準4：教育課程・学習成果

「改善が必要と思われる点」として、①ディプロマ・ポリシーを細かく設定することでディプロマの持つ範囲を狭めてしまうのではないかという危惧、②ステークホルダーが理解可能な内容および表現にすることが大学に対する注文にならないようバランスに配慮した表現を工夫する必要性、③「多様な学生」について、今後は学士課程でも社会人のニーズを考慮する必要性、の3点について指摘したが、これらの基本的な姿勢は確認できた。今後も早急に具体的な対策を講じるというよりも、継続的な検討を期待したい。

学習成果については卒業・修了時点の評価も必要だが、アウトカムは長い人生を通して活かされるという視点から、同窓会を活用するなど中長期的に何らかの形で大学の学びを評価する仕組みがあるとよい。

教学面のチェック体制については現在検討中とのことだが、実際の実施状況をどのように把握し、それに対する教職員へのフィードバックをどのように行っているかを明確にすることが求められる。

基準6：教員・教員組織

教員評価を規程化し、別表もきちんと定められているので、今後は優れた教員へ奨励手当を出すことにとどまらず、昇任評価や役職任用に活用されるようになることが望まれる。

基準7：学生支援

ハラスメント相談について、コロナ禍の事情からやむを得ないかもしれないが、相談案件をウェブサイトの申し込みフォームという形で書くことはハードルが高いと思われるため、もう少しアクセスしやすい方法が考えられるとよい。

基準8：教育研究等環境

Open Course Ware や YouTube などの動画について、受験生用の紹介動画やオープンキャンパス用のコンテンツは非常に充実している反面、実際の講義科目のコンテンツはそれほど多くないと感じた。講義科目動画の充実について、広報効果はもちろんであるが、今回

のコロナ対応のような危機管理や教員の授業改善にも役立つと思われるため、今後増加されることを期待したい。また、ウェブサイト全体の見せ方についても工夫の余地はあるかと思われる。

以上

参考

1. 上智大学学外評価小委員会次第
2. 上智大学学外評価小委員会委員名簿、本学関係者一覧

2020年度上智大学学外評価小委員会 次第

2020年6月29日(月) 12:30~14:00
Web会議

(委員入室)

12:30-12:35 学外評価委員顔合わせ

(本学関係者入室)

12:35-13:40 学外評価委員、本学執行部との意見交換

12:35-12:40 本学関係者紹介

12:40-13:00 意見交換1 (カトリック大学の特徴について)

13:00-13:20 意見交換2 (教育課程、学習成果、教学マネジメントについて)

13:20-13:40 意見交換3 (内部質保証の体制、グローバル化について)

(本学関係者退室)

13:40-14:00 学外評価委員打ち合わせ

(委員退室)

以上

2020年度上智大学学外評価小委員会 委員名簿

(敬称略、アルファベット順)

委員長	ミカエル・カルマノ	南山学園聖園女学院中学校・高等学校 校長
委員	おおば まさこ 大場 昌子	日本女子大学 前学長 文学部英文学科教授
委員	つぶらや めぐみ 円谷 恵	国際基督教大学 理事

<上智大学関係者>

てるみち よしあき 曄道 佳明	学長
おおつか じゅろう 大塚 寿郎	学務担当副学長
ふじむら まさゆき 藤村 正之	高大連携担当副学長
ひさた みつる 久田 満	学生総務担当副学長
すぎむら みき 杉村 美紀	グローバル化推進担当副学長
えま かずひろ 江馬 一弘	学術研究担当副学長

以上

